

平成30年度 第2回尾張東部教科用図書採択地区協議会 議事録

- 日 時 平成30年7月10日(火) 14:00
- 場 所 スカイワードあさひ ひまわりホール
- 出席者 協議会委員 34名 (欠席1名) 研究部長 12名

1 開 会

- 開会宣言

2 会長あいさつ

- 尾張東部教科用図書採択地区協議会会長よりあいさつ
 - ・ 本日の会議は、教科書採択の公正確保のため、非公開で行うことを確認する。
 - ・ ここに至るまでの経過報告。

平成30年5月9日(水)と5月23日(水)に本協議会の研究員打合会を開催し、その後、教科用図書について研究。
 - ・ 本日、その研究成果を報告するとともに、委員の協議により、本地区の子どもたちにとって一番ふさわしい教科用図書を選定していきたい。

3 協議方法について

- 選定の方法
 - ・ 協議会の会議において、委員全員の一致によって決まる。
- 資料の確認
 - ・ 愛知県教育委員会採択基準
 - ・ 尾張東部教科用図書採択地区協議会選定資料
- 協議進行の手順
 - ・ 研究部長より、選定資料をもとに各教科用図書の説明
 - ・ 研究部長に質疑
 - ・ 研究部長退席後に、協議・選定

4 教科部長報告及び質疑、協議

- 小学校各教科の報告
 - ・ 見本本の送付のあった各出版社の教科用図書について研究し、報告(学習指導要領との関連、あいちの教育の基本理念との関連、内容、表記・表現及び使用上の便宜等、印刷・造本等)。
- 小学校各教科の質疑
 - ・ 採択に当たり準拠すべき事項に、小学校の編成する教育課程に最も適する教科書をとあるが、教育課程からずれているような内容もあったか。
 - 現在のものと合わないものはない。

- ・ 「あいちの教育の基本理念」との関連において、何か課題となるようなことがあったか。
 - 特に課題となるようなことはない。
 - ・ 教科書の内容については、平成26年度採択の教科書から大きな変更はないと思われるが、今回の採択に当たって特に留意すべき点はあるか。
 - 特になし
- 小学校各教科の協議
- ・ 今年の採択に当たっては、平成29年度に検定を受ける教科書がなかったということで、平成26年度検定済みのもの中から選ぶことになっている。本来なら採択替えの年になるが、平成31年度にも新学習指導要領での採択が行われることで、2年続けて採択替えをすることはないのでないか。また、先ほど研究部長からの報告があり、この4年間の使用実績からしても、特に今回使用の教科書でも問題がないのかなと考えるので、道徳を除く小学校各教科については、いずれも継続使用が望ましい。
 - ・ 各教科とも、しっかり研究されている。4年前も、選定時にしっかり調査研究され、採択協議会での議論を経て今の教科書が採択されている。そして、今回の採択では新しく検定を受けた教科書はないので、4年前と同じ教科書を調査研究している。各研究部長からの報告では、特に問題はなかった。また、現場で、今使用している教科書が使いにくいとか聞いていない。来年また、新しい学習指導要領に添った教科書の検定があるということで、仮に今回採択替えがあったとしても、1年間の使用となる。これまで4年間の使用実績を踏まえると、現在採択している教科書が適切である。
 - ・ 今回の教科書採択に関わっては、平成29年度検定において、新たな図書の申請がなかったことなので、平成25年度検定の教科書から採択を行うことになってる。つまり、本年度調査研究をした教科書は、平成26年度の採択時にも十分な調査研究や採択協議会での議論を経て採択されたものである。また、4年間の時間経過があるが、変更が必要な部分については、いずれの教科書も対応されており、現在の各校が使用している教育課程にも合致している。それから、今回の調査研究の結果から、いずれの観点においても現在使用されている教科書を引き続き使用することが望ましいということが他の方の意見を踏まえてわかった。
したがって、道徳を除く小学校の各教科の教科書は、いずれの教科においても引き続き選定することが適切である。
 - ・ 協議の結果、全員一致で現在使用している教科用図書を選定する教科書として決定。
- 中学校道徳の報告
- ・ 見本本の送付のあった東京書籍、学校図書、教育出版、光村図書出版、日本文教出版、学研教育みらい、廣済堂あかつき、日本教科書の8社について研究し、報告（学習指導要領との関連、あいちの教育の基本理念との関連、内容、表記・表現及び使用上の便宜等、印刷・造本等）。
- 中学校道徳の質疑
- ・ 画一的な指導ではなく、多様な指導方法や「考え議論していく」ことが求められているが、そういった観点で今回の各教科書にはどんな工夫があったか。
 - 各社とも指導方法が画一的にならないように、多面的に考えることができる教材を積極的に取り上げていると感じた。また、授業展開においても、体験活動を取り入れたり役割演技を設定したり

するなどの工夫が見られた。

個々の生徒がしっかりと考え議論していく授業を展開するために、問題解決的な学習が行いやすい教材が数多く取り入れられていた。各社別の工夫としては、東書には「つぶやき」、光村には「私の気づき」という生徒が書き込めるコーナーが設けてあった。学図は「学びに向かうために」、教出は「学びの道しるべ」という欄があり、ポイントとなる発問が記載されていた。日文と廣済堂は別冊のノートに自分の意見を書くスペースがあり、学研は複数の意見提示や関連情報の提供で、日本教科書は答えが一つではない課題を出すことで議論を深めていこうとする工夫があった。

- ・ 別冊でノートがついている会社が8社のうち2社ということだが、ノートの有無や活用については、どのような話し合いがなされたか。

→ 別冊のノートがついているのは、日文と廣済堂の2社。ただ、書き込む部分が全くないわけではなく、教材の中で立ち止まって考えてほしいところに思いを書くスペースが設けてあったり、振り返りや自己評価を書くことができるスペースがあったりと、それぞれの教科書ごとに工夫がされている。

ノートの利点は、授業の流れがはっきりとわかること。書くという活動で言語活動の充実が期待できる、記録として残るので生徒が自らの成長を実感したり確かめたりできる、指導する教員にとっても生徒の学びを把握しやすいことや評価に役立てることができることなどが挙げられる。

反面、ノートに記入することが中心になりかねない。他の教材を使用したときに何も書かれないページが残ってしまう。あらかじめ次の発問や指示がわかってしまうために、生徒が、次はこの発問がくるのだなと分かっしまい考えに影響が出てしまう。これでは教員の創意工夫が生かせる範囲が狭まる。教材としての量が増えることなどが懸念として挙げられる。

研究員の論議では、利点と心配な点が両方挙げられたが、やはり、それぞれの教員が学級の実態に合わせて、授業づくりの中でワークシートの作成や資料提示を工夫していくべきであるとの観点から、指導する教員の創意工夫の範囲が狭まってしまうという心配の方が大きいようだった。

- ・ 道徳は授業で学習するだけでなく、生活の中で実践する力を育成していくことも大切である。そういう意味で、子どもたちの実生活との関連を各社どのように扱っていたか。

→ 各社とも、学校生活や家庭生活の中での場面を取り上げた教材、あるいは地域の人々との関わりを取り上げた教材など、生徒が自らの生活と関連づけて考えたり、もし自分だったらどうするかを話し合ったりできる教材を数多く取り入れている。そうした教材で学習を進めることを通して、道徳的価値や指導事項を、より自分のこととして捉えられるような工夫がある。

8社とも、生徒により身近な題材や実生活に目を向けた題材を積極的に取り入れようとする努力が感じられた。さらに加えれば、東京書籍と教育出版が役割演技や体験活動を効果的に活用しているように感じた。また、光村図書は、登場人物が生徒と同じ年頃であったり、漫画形式の教材があったりした。

- ・ いじめに関する対応も大切な観点のひとつであるが、この「いじめ問題」の取り扱いについて特徴的なことがあったか。

→ 今回の道徳の教科化は、「いじめ問題」への対応や対処も大切な観点のひとつである。もちろん、いじめ防止については人権尊重については、学校生活全般にわたって指導していくことではあるが、道徳の授業がその中心的な役割をもつことは言うまでもない。

そういった意味からも、今回研究した8社とも「いじめ問題」には力を入れており、多くの会社が1年生から3年生までの全学年に複数の教材を配置していた。

特徴的なことを言えば、東書は、各学年とも3教材をまとめたユニット構成にしてあり、教出は、いじめ問題そのものを考える他に、命の大切さから迫ったり、友達関係から考えたり、自分を見つめさせたり、畏敬の念から考えたりと実に多様な視点からアプローチできる教材の工夫が感じられた。光村と日文には、コラムを活用した教材が効果的に配置され、学研は、「いじめ問題」の特設ページが設けてあった。

- ・ 高めたい価値とか、考えさせたい価値そういったことについて生徒に話し合わせるときに、教師がこの教材を使うと生徒の意見がぶれてしまうな、といった心配があったり、主発問が教科書に載っていることがあり、教師が価値を検討させていくうえでずれがあったり、絞られてしまったりといったことが話の中であったかということがひとつと、教科書が大変厚くなって、生徒が登校してくるときに大変重い様子が報道されているが、このことについても議論があったか。

→ 各社とも、議論し話し合う道徳を重視する内容となっており、言葉は違うが、適切な発問だと思う。中には少し具体的で、この言葉でないといけないのかなと思うところがいくつかあったが、やはり子どもたちに、教材を通して実際に議論させることをそれぞれが重視しており、ぶれているとは感じなかった。また、学習指導要領にも準拠していた。

かばんの重さについては、直接的な内容とは違うかも知れないが、研究部会でも話題のひとつとして取り上げた。今回、研究した8社の教科書の大きさやページ数には特徴的な違いがあった。まず、大きさは、学研1社がA4判で最も大きく、東書、学図、廣済堂の3社がA3判で、残りの4社がB5判だった。一学年平均のページ数については、表紙や裏表紙を合わせて、最も多い日文と廣済堂が244ページ。ただ、この2社はノート付き。ノートが付いていない残り6社では、光村が234ページで、次いで学図の229ページが厚い方。それ以外の4社は、190ページ程度。教科書のページ数が多いということは、直接書き込む部分が多いこともあるが、やはり一つ一つの教材文が長くなる傾向にある。ちなみに、東京書籍や教育出版などは、2年生だと思うが、教材の半分以上が4ページで終わっていた。光村図書については25%くらい。一つ一つの教材が長いとどうしても読み取り中心の授業になってしまいがちで、読み取りが不得意な生徒にはつらいという実情報告もあった。

- ・ 道徳が教科となったことにより、評価についても考えていかなければならないが、教師側の評価について話し合われたことがあったか。

→ 自らの学びを振り返ることは、道徳に限らず大切な活動である。とりわけ道徳は、自己評価を適切に取り入れていくことで、より深い学びにつなげたり自らの成長を感じ取ったりできる。そういった観点において、各社とも評価についても様々な工夫がなされている。

日文と廣濟堂は、別冊ノートにしっかりとした振り返りを書く欄がある。東書、学図、光村、学研、日本教科書は、巻末に学びを振り返るページが設定してある。教出は、学期ごとの振り返りの他に教材ごとに「心のかがやき度」という欄があり、色を塗ることで可視化し、短時間の作業で自らの心の変化や成長を実感でき特徴的な工夫である。

通知表等への評価については、他の教科とは違って5・4・3・・・といった評定をつけずに文章による表記となる。教師は、上述した生徒の自己評価も参考にしながら、日々の授業を大切にするとともに、生徒の変容を的確に捉えて行かなければならないと話し合った。

○ 中学校道徳の協議

- ・ 今回の教科化は「考え、議論する道徳」に転換することと、いじめ問題の解消・未然防止の働きをすることが期待されており、その実効性も求められている。いじめ問題に対しては、いずれの教科書とも取り扱っており、現在の社会の求める内容であるといえる。その中で、光村図書と日本文教出版はコラムがあり、学研は特設ページを設定しているなど、各社に工夫が見られる。他にも、東京書籍は、各学年で3つの教材をまとめたユニットで構成してあり、教育出版は、命の大切さからいじめに迫ったり、友達関係から考えさせたりと多様な視点からアプローチがみられる。内容面から考えると、東京書籍と教育出版が、他の教科書に比べ優れていると思う。
- ・ 生徒自らの振り返りと教師の評価という視点で考えた。大きく分けて説明があったように3つに分かれると思う。別冊ノートがついている教科書は日本文教出版や廣濟堂。ノートがあることで授業の記録がのこり、自らの学びの足跡を確認できる点で利点はあると思う。二つ目に、東書、学図、光村図書、学研、日本教科書は、教科書の巻末に学びを振り返るページが設けているものもある。三つ目は、教育出版は、学期ごとの振り返りができ、この点は、授業者としての評価を考えると活用しやすい工夫である。さらに、各教材ごとの彩色によって可視化できているので、短時間で評価できる工夫も良いと思う。以上のことから教育出版が適していると思う
- ・ 道徳の教科化ということを考えていくと、内容面のところにポイントがあると思う。道徳の4つの視点の中に内容項目をいかに配列されているか、現代的な課題であるいじめについて触れられているか。そういった視点の中で新学習指導要領にうたわれているように、主体的で対話的で深い学びということも意識しながら考えを深めていけるようにしていく。そういったことを考えると、教材の長さはどうかと思って聞いていた。光村出版の教科書は、1年間を4つのシーズンとして大まかなまとまりに分け、内容項目ごとに関連が意識できることになっており、小学校で使用している教科書と同じである。また、日本文教出版も、発達段階を考慮した大テーマを各学年に設定し、小学校や高等学校との連携に配慮した教材配列がされている。教育出版は、「考え、議論する道徳」を目指し、教材がコンパクトで内容が理解しやすいことや、いじめ問題については、多様な視点からアプローチできるような教材が選択されていると共に、3年間を通して体系的に学習できるようになっているということが報告され、それぞれが長所が認められるが、これからの道徳の在り方とか社会の問題化したいじめの対応を考えると教育出版がよいのではないかと思う。
- ・ 教育出版の教科書は、人間尊重と生命への畏敬の念を培うことのできる教材を多く取り上げ、各学年にバランスよく配置されている。そして、各教材が学習指導要領に示された4つの視点のどこに該当するかを色別に表示してあり、学習の視点がわかりやすくなっている。

また、生徒が問題意識をもちながら学びを進めていくために、学習の流れとポイントがわかりやすく表現されている。さらに、生徒にとって身近な教材や切実感のある教材が多く掲載され、自己を見つめながら考えたり話し合ったりして学びを深めることができると考えられる。小学校からの連続性を考慮し1年生の1学期教材は本文の文字を大きくしてある工夫も見られる。

委員の方々や、研究部長の報告、またその質疑を考えると、他の教科書もそれぞれにいい点はあるが、教育出版の教科書を選定する教科書として推薦する。

- ・ 協議の結果、全員一致で「教育出版」のものを選定する教科書として決定。
- その他の教科用図書
 - ・ 中学校の道徳以外の教科用図書については、採択基準にしたがい、平成30年度と同じ教科用図書を使用する。

5 その他

- 採択協議会事務局のローテーションについて

6 連絡、依頼事項

- 資料の取り扱いなどに関する連絡

7 閉会

- 閉会宣言